

週日の説教

金 大烈 神父 2010年2月11日(木)

《飾りではなく中身》

物を包んで飾ることを「包装」と言います。では、物を包装する目的は何でしょうか。

一つは、その中身の物を保護するためです。

二つ目は、「このように心をこめてこれをあなたに差し上げます」という心をこめきれいな紙で飾るために包装します。しかしいくら包装しても、相手に渡るのは、その中身の物です。あちこちでいろいろなプレゼントをいただきますが、たまにはもったいなくて包装紙をやぶるのに心が痛むような物もあります。そして開けてみると中身は小さなものです。韓国の表現では、「へそがおなかより大きい」と言います。(笑い)

私たちはこのような時代に生きています。物だけでなく、人間に「包装」という言葉を当てはめると「仮面」という言葉が思い浮かびます。

人間にとっては飾ることも必要です。たとえば、奥さんが何日も顔を洗わず化粧もしないで、髪の毛はボサボサにしていたら、それもいけないことですよね。しかし私たちが大切にしなければいけないのは、やはりありのままの姿だと思います。

今日の福音(マルコ7:24-30)では、シリア・フェニキアの女性がイエス様のところへ来て「悪霊に取りつかれている娘を助けてください」と言いました。それを聞いたイエス様は、本当にひどい答えをなさいます。「食卓にあるものは、まず子ども達に食べさせなければならない。小犬にやってはいけません。」と。しかしその話を聞いたこの女性は予想もつかない答えをしますね。「食卓から落ちるパンくずは子犬もいただけるのではないのでしょうか。」と。そのように自分の心を表したのです。そこでイエス様は、「よろしい。それではあなたが望んでいる通りになる。」と返事を変えます。

イエス様がなぜこのようにひどい返事をなさったのか、黙想してみました。そして、今の時代に生きている私たちに次のようなことをおっしゃっているのではないかと思ってみました。

イエス様が見ようとするのはやはり心です。その人自身です。その人の願い自体です。異邦人が同族かが重要ではなかったんです。周りの人々はイエス様が異邦人の婦人をどのように扱うのかが気になったんでしょう。その様な雰囲気を見通されたイエス様はわざわざ異邦人の女性にきつい反応を見せたんでしょう。

しかし私たちは、神様に対しても自分を包装して、飾って、見せようとするくせがあるのではないかと自分自身も含めて反省してみました。イエス様が望んでいるのはありのままの私たちの姿です。ですから、悩み、弱さ、困っていること、それらを全てそのまま持って行くことをイエス様は望んでいらっしゃるのではないのでしょうか。それなのに、なぜ私たちは神様の前でさえ率直な心を表すのが難しいのでしょうか。なぜいろいろな言い訳をしようとするのでしょうか。なぜ既に全てのことをわ

かっていらっしゃる神様の前なのに、何とか飾ろうとしてするのでしょうか。仮面をかぶってみ前に行こうとするのでしょうか。

このシリア・フェニキアの女性の「どうしてもこの子を生きさなければならぬ」というような願いを私たちも神様に見せる必要があるのではないのでしょうか。イエス様は中身を見ます。もちろん飾りも必要です。しかし、私たちが本当に必要としているのは中身です。その中身のことを今日の福音をとおしてもう一回考えてみたらよいのではないかと思ってみました。

少し悲しいことなのですが、この世の中、宗教的な動きを見ても、商品化、包装化されているような気がします。福音を述べ伝えることではなくて福音を述べ伝えるために準備したものが主になっているような気がします。私たちがそういうことも考えてみるべきではないのでしょうか。イエス様の前では、何も隠すことができません。そして隠さない心で私たちが近づけばイエス様は必ず聞いてくださいます。

もう一つこの福音を通して分かることがあります。それは、“無条件にはイエス様は癒してくださらない”ということです。何でも聞いてくださるわけではありません。条件があります。その条件は私たちの態度です。それを願う心が正しいかどうか、神様は図っていらっしゃるのです。そのことをもう一回考えてみましょう。それとともに、私たちが何を願っても神様は私たちに一番よいことをまず考えてくださることも信じましょう。

ありがとうございました。